

児童の教室英語使用に焦点を当てた外国語活動の実践 —児童が使用する教室英語の効果を示すモデル図の提案—

内 山 寿 彦*・染 谷 藤 重**

(令和2年2月3日受付；令和2年4月20日受理)

要 旨

本研究の目的は、新学習指導要領により、「やりとり」と「発表」に細分化される「話すこと・聞くこと」について、「やりとり」に着目し、より積極的なコミュニケーションを図ろうとする児童の育成をねらった実践研究である。

そのために、児童が使用するクラスルーム・イングリッシュに焦点を当て、様々な会話で使用可能な9種を取り上げた。それを級友（クラスメイト）とのやりとりで使うことができたかどうかを自己評価させるとともに、その自由記述から質的に分析した。分析には、GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いた。分析の結果から、クラスルーム・イングリッシュには、言ったり言われたりした際の直接的効果とともに、人間関係を深化させる効果があることが示された。また、そこから外国語活動の目標であるコミュニケーションの素地を養うことと良好な学級集団の形成にも関係するというモデル図を提案することができた。

KEY WORDS

Interaction：やりとり Classroom English：クラスルーム・イングリッシュ

人間関係：Human relationships Communication：コミュニケーション GTA：Grounded Theory Approach

1 研究の背景

1. 1 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度

児童が決められた話型を暗記し、それを手本通りに再現することが、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながるのだろうか。

小学校外国語活動が本格実施され、教科化を見据えた動きも本格化してきた。コミュニケーション重視、話すことと聞くことに比重を置く活動が各学校で既に行われているところである。しかし、何をもってコミュニケーションが成立したか判断することは、評価者である学級担任に任せられており、その評価の難しさに著者は頭を悩ませていた。

旧小学校学習指導要領（文部科学省、2008）においては、内容の取扱いについての配慮事項として〔コミュニケーションの働きの例〕を示し、（ア）相手との関係を円滑にする、（イ）気持ちを伝える、（ウ）事実を伝える、（エ）考えや意図を伝える、（オ）相手の行動を促すという5点を挙げている。そして、『Hi, friends!』のLessonに対応するようにその具体例を挙げている（文部科学省、2008ab）。また、文部科学省（2014）は、次期学習指導要領等の構造化のイメージにおいて、資質・能力の三つの柱を「個別の知識や技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」と定め、小・中・高を通じて外国語教育において育成すべき資質・能力の整理を行った。そして、「学びに向かう力、人間性等」の中に情意、態度に関わるものを位置付けている。小学校段階では、外国語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさや言語を用いてコミュニケーションの大切さを知り、相手意識を持って外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を挙げている。

著者は、数年間、外国語活動主任を経験する中で、小学校外国語活動で重要なのは、児童がコミュニケーション成立の喜びを感じることにありと考えるようになった。コミュニケーション成立の喜びとは、既習した表現をアドリブで発話し、相互に会話が続いていくことだと考える。そして相手意識があるとすれば、そのLessonで習った英会話だけでなく、日本語よりも容易に感情を込めて英語で発話しようとするはずである。その姿こそが、コミュニケーションを図ろうとする態度の深化した状態と言える。

1. 2 クラスルームイングリッシュの重要性とその研究方法

クラスルームイングリッシュについての先行研究は、主として教師が調査対象になっている研究が多い。しかし、考察や今後の課題において、児童・生徒についても調査が必要であると言及しているものがある（e.g., 五十嵐, 1988, 梅地, 1992）。五十嵐（1988）は、クラスルームイングリッシュは生徒たちにも大いに使用してほしい英語であると述べている。それによって、生徒たちが教師や級友（クラスメート）たちと打ち解けることができ、授業への集中度も高まっていくことになるであろうと述べている。

また、梅地（1992）は、教師の英語発話が増えることによって得られる効果の研究が必要であり、効果の一例として、学習者の英語学習及び英語使用に対する態度や意識の変容といった、英語習得面におけるCE（Classroom English）（クラスルームイングリッシュ）の間接的影響について、今後の研究課題として挙げている。このように、児童対象の研究は十分になされていない。

さらに、先行研究の中には、階戸（2012）のように、研究対象が小学校教員ではあるものの、質的研究によって述べられているものもある。現在の小学校外国語活動の評価が記述式であり、得点で評価する量的な学力分析をしていない点からも、児童を質的に研究することは小学校の現状に十分合致していると考えられる。

以上のことから、本研究では、児童がより相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度は、どのようにしてよりよく伸長することが可能なのかという視点を持ち、クラスルームイングリッシュの獲得と使用という手立てから、質的研究によってその効果を明らかにする。

2 研究の目的

本研究では、外国語活動の授業においてクラスルームイングリッシュの意味を理解させ、また、それらを教師がALTと共に積極的に使用することで、児童が使用可能なクラスルームイングリッシュの種類を増やしていく。そして、その活用場面を質的に分析し、モデル図の提案からクラスルームイングリッシュの重要性を明らかにする。

3 研究の方法

3. 1 参加者

J 市立K小学校における5学年27名である。この学校は、市の中心部より離れたところにあり、基本的には、同じ地区の中学校に進学し、中には、少し離れたところにある国立大学附属中学校に進学する児童も存在する。英語の授業に関しては、幼いころから共に過ごした時間が長かったため、人間関係が良好であり男女の仲もよい。そのため、外国語活動においても、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られる。

3. 2 実施時期

本実践と調査は、2016年4月から2016年7月に行われた。

3. 3 分析方法の手順

グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach: GTA）の手法をもとに、階戸（2012）が行った分析方法の手順に従って分析を行った。GTAとは、前もって仮説を立てるということはせず、データを分析する中で「仮説」や「理論」を導き出していくことを目的する手法であり、Glaserらによって開発された。

分析の手法は以下の通りである。

①外国語活動ふりかえりシート（表1）にあるクラスルームイングリッシュを理解し、定着させる授業を1学期間継続して行う。実施時期最終日である7月20日の授業後に、表1を配付し自己評価をさせる。また、その日の授業の様子をビデオカメラで撮影する。ふりかえりシートと撮影動画を文字化・テキストに②同じような内容の箇所をコーディングする。

③似たコードをまとめ、上位概念としてカテゴリーを設ける。

④カテゴリー同士についてサブカテゴリーを設定した上で関係づけて理論（モデル）化を行う。

表1 外国語活動ふりかえりシート

1. 今日の活動で、気の利いた返事を言えましたか。自分が使った英語に○をつけましょう。ジェスチャーを付けて言えた人は◎をつけましょう。			
My turn. マイターン	Your turn. ユアターン	Me? ミー？	Are you OK? アーユーオーケー
Good. グウツ	Thank you. サンキュウ	Yeah! イエー！	Oh, no! オーノー！
Here you are. ヒアユアー	そのほかにあったらカタカナで教えてください。		

2. 気の利いた返事を言った（言おうとした）時、話し相手に対してどのようなことを考えていましたか。			
3. 気の利いた返事を言ってもらった時にどんな気持ちになりましたか。			

3. 4 活動の実際

本実践は全て外国語活動の時間内に行い、実施時期におけるすべてのLessonで意図的かつ具体的に取り上げるようにした。前述の表1に記載の通り、“Good!” “Are you OK?” “Thank you.” “Yeah!” “Oh, no!” “My turn?” “Your turn.” “Me?” “Here you are.”の8種類のクラスルームイングリッシュの定着を図った。この8種類とした理由は、著者が考える児童にとって使用が容易であるものと、『Hi, friends! 1』教師用指導書に記載してあるもの、そして中学校英語科の授業でも用いられているものだからである。

まず、著者とALTとの寸劇(デモンストレーション)で児童に意味理解を図った。次に、全員でそのクラスルームイングリッシュを発音する練習をし、使用しやすい状態まで覚えさせた。最後に、それを児童が実際に使用する場面を設けることとした。これらの活動を繰り返し行うことで児童はクラスルームイングリッシュを徐々に身に付けていった。そして、1往復のコミュニケーションで完結することなく、会話を継続させていけるようになった。さらに、クラスルームイングリッシュの良さに気付きながら活動している姿が見られた。なお、児童に対しては「クラスルームイングリッシュ」という呼び名では説明せず、「気の利いた返事」という表現を用いることとした。これは、「返事」という言葉を遣った方が、会話を継続することを児童が意識しやすいと考えたからである。また、授業中には、黒板に気の利いた返事の一覧として、英文で8種類のクラスルームイングリッシュを表記し、使用の助力とした。

クラスルームイングリッシュの具体的な使用場面は、以下の2点とした(表2)。

表2 クラスルームイングリッシュの具体的な使用場面

具体的な使用場面	クラスルームイングリッシュ
1. あいさつをする活動	Are you OK? Good. Thank you.
2. ゲームの活動	My turn. Your turn. Me?
「Hi, friends! 1」巻末にあるミニカードを使った会話活動	Good. Thank you. Here you are. Yeah! Oh, no!

1点目は、授業の始めに行われる“How are you?”に対する応答である。ただ自分の体調を答えるのではなく、その応答に対してさらに返事を返してほしいと願い、“I’m tired.” “I’m sleepy.”等、体調が優れないと答えた時に返す返事と“I’m fine.”と元気だという意思表示をした時に返す返事を指導した。毎時間行われる活動であるため、始めは使用できないことが多かったが、数回の授業を経て、全ての児童が気の利いた返事を返そうという意欲をもって、相手と会話をしている様子が見られるようになった。

2点目は、ゲームの活動や『Hi, friends! 1』巻末にあるミニカードを使った活動の時間とした。会話の順番を決めたり、尋ねたりする時に使用するクラスルームイングリッシュ、相手を褒めたり、コミュニケーションを円滑にしたりする言葉、自分の感情を表現する言葉といったものを使用できるようにした。じゃんけんゲームやカルタゲーム、ポインティングゲームで、これらを使用する活動があり、ゲームの内容が違って、児童は積極的にクラスルームイングリッシュを言うようになった。

4 結果

4. 1 クラスルームイングリッシュを言った（言おうとした）場面

児童がクラスルームイングリッシュを言った（言おうとした）場面での、外国語活動ふりかえりシート及びビデオ分析によるコーディング、およびカテゴリーは表3の通りである。

表3 クラスルームイングリッシュを言った（言おうとした）場面

カテゴリー；クラスルームイングリッシュの使用努力	カテゴリー；日本語と英語の情意一致
<ul style="list-style-type: none"> ・「I'm hot.」と言ったら「Are you OK?」と言ってあげようと思った。 ・先に相手に「Your turn.」と言うのは失礼だから、「My turn.」といった方がいいと考えた。 ・どんな言葉を言ったらいいか思考している。（ビデオ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・カードが取れてよかったねと思って使った。 ・「Good.」と言って、いいね、と思っていた。 ・「Are you OK?」の時に、心配しながら言った。 ・大丈夫かな、と思った。 ・「気分がいいよ!」という人にはよかったね、と思った。 ・他の人に本当に大丈夫か聞きたくて聞いた。
カテゴリー；クラスルームイングリッシュ使用の安心感	カテゴリー；クラスルームイングリッシュ使用への興味
<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔でクラスルームイングリッシュを使用している。（ビデオ） ・気の利いた返事を言ったら、相手も返してくれると思った。 ・もし相手の人と同じ気持ちだったら嬉しい。 ・相手がいる時に「Thank you.」と言って、相手と気が合ったと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に話し相手を探そうとしている。（ビデオ） ・ジェスチャーをした方が伝わるから恥ずかしいけどやってみようと思った。 ・どんな返事を返してくれるだろう。 ・「My turn.」と言った時にどちらなのか分からなくて、私かな？と思った。

クラスルームイングリッシュに対して、否定的な記述は見られず、積極的に使用してみたいということが書かれていた。また撮影した動画からも、笑顔で友達と関わろうとする姿が観察された。実践期間内に繰り返し取り扱ったことで、クラスルームイングリッシュをどのように使おうかと考える姿勢や、使用するした場合に、相手に意味が伝わったという安心感が児童の中に育ったと考えられる。つまり、「日本語と英語の情意の一致、使用言語が英語であっても、その意味が相手に伝わる喜び」が児童の中で起こっていたことになる。先行研究で述べられている通り、児童たちが打ち解けるようになったと自己評価する結果となった。ただ単にクラスルームイングリッシュを使用するという活動の課題を超え、第2言語である英語を用いて、友達との関係が良好になっていることが記述から判断できる。

4. 2 クラスルームイングリッシュを言ってもらった場面

児童がクラスルームイングリッシュを言ってもらった場面でのコーディング、およびカテゴリーは表4の通りである。

表4 クラスルームイングリッシュを言ってもらった場面

カテゴリー；クラスルームイングリッシュへの好感
<ul style="list-style-type: none"> ・「Nice.」など言われ、笑顔で返してくれた。 ・気の利いた言葉を使ってもらってよかった。 ・Are you OK? と言ってもらった時は、心配してくれて嬉しかった。 ・「I'm fine.」と元気に言ったら、友達が「Good.」と言ってくれた。 ・自分で取ることができたカードを気の利いた返事で返してくれて嬉しかった。 ・気の利いた返事を言うと言語が楽しくなる。 ・「Good job!」と言ってもらった時にすごく嬉しかった。 ・相手の人が「Are you OK?」と言ってくれたことが嬉しかった。

カテゴリー：温かな人間関係の構築

- ・心が温かくなったり、嬉しい気持ちになったりした。
 - ・目と目を見て会話をしている。(ビデオ)
 - ・相手もとても優しく言ってくれて嬉しかったし、自分の気持ちをわかってくれて言っていたので嬉しかった。
 - ・気の利いた返事を言ってもらえて嬉しかった。
 - ・普段あまり話さない児童が笑顔で英語の会話をしていた。(ビデオ)
-

カテゴリー：クラスルームイングリッシュ使用の促進

- ・次の話し相手を探すために、教室を見回したり、相手がいない児童を見付けたりしている。(ビデオ)
 - ・気持ち良い気分になり、こんないい思いをいっぱいしてあげよう！と思った。
 - ・自分も言ってもらったのだから、ちゃんと言わなきゃ、という気持ちになった。
 - ・今度からはもっと「Are you OK?」や「Your turn.」をもっと使いたい。
 - ・心配してくれているので、ほくも気の利いた返事を言いたくなった。
-

クラスルームイングリッシュを言ってもらったことへの喜びを記述する児童が多くいる結果となった。撮影動画からも笑顔で会話が弾む様子が数多く見られた。また、ここでは「温かな人間関係の構築」というカテゴリーを作成した。英語の使用ということより、児童が自分自身の人間関係について述べている記述が多く見られたためである。クラスルームイングリッシュを言った（言おうとした）場面でのカテゴリーと同様の心情が書き表されていた。

4. 3 サブカテゴリーの設定

児童一人一人のふりかえりシート記述に戻り、クラスルームイングリッシュをどのように捉えているか再分析することで、サブカテゴリーを設定した。分析結果は以下の通りである。

- ①積極的にクラスルームイングリッシュを使用する児童は、クラスルームイングリッシュに対して好感を持っている。
- ②クラスルームイングリッシュを相手に言われ、結果として好感をもつことができた児童は、自分も言ってあげようという意識をもつようになっている。
- ③自分が言ったのか、相手に言ってもらったのか、という違いがあるが、双方ともにクラスルームイングリッシュを使用したいという考えをもつようになっている。
- ④クラスルームイングリッシュを使用した会話に成功した児童は、「この言い方で良いのだ。」という安心感もち、次回も使ってみたいと記述していた。
- ⑤著者はクラスルームイングリッシュという英語使用に焦点を当てて、授業を展開してきた。児童のふりかえりシートの記述においても、クラスルームイングリッシュについて考えているものが多かった。これを直接的効果とした。さらに、クラスルームイングリッシュを言ってもらった立場であっても、人間関係がより良好になったという自己評価記述が見られ、先行研究が示す通り、児童たちが打ち解けたと感じる結果となった。そこで、これを人間関係深化効果とした。

5 考察

以上の結果から、著者が提案する児童が使用するクラスルームイングリッシュの効果を示すモデル図が、図1である。

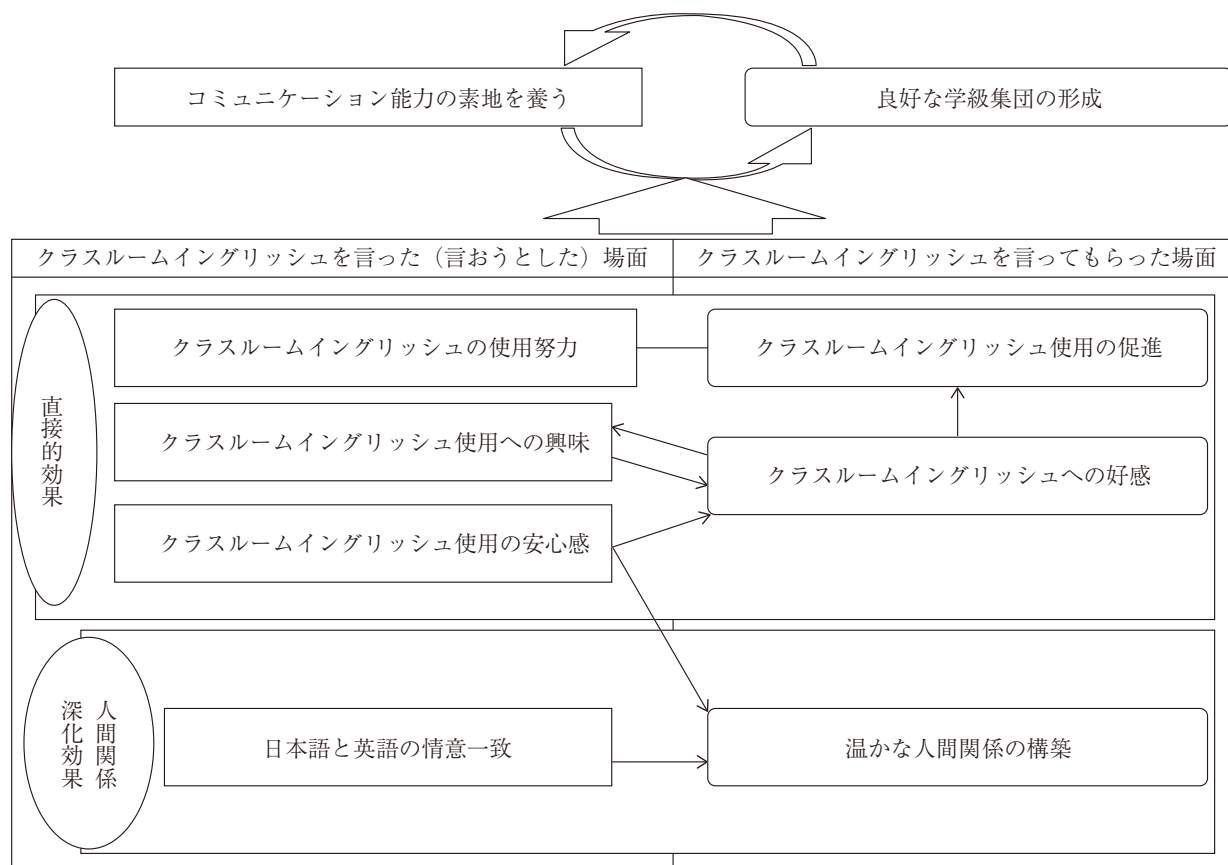


図1 児童が使用するクラスルームイングリッシュの効果を示すモデル図

クラスルームイングリッシュを言った（言おうとした）場面とクラスルームイングリッシュを言ってもらった場面とが図1のように関連している。また、クラスルームイングリッシュ使用による効果は、直接的効果と人間関係深化の効果が考えられる。これらの効果が、外国語活動の重要な目標である「コミュニケーション能力の素地を養う」と「良好な学級集団の形成」に向かい、この2つが互いに影響し合いながら循環していくことでさらに高次へ進んでいくと考えられるだろう。

まず、クラスルームイングリッシュの直接的効果については、児童に興味や好感、安心感をもたせていくことが、さらに活発にクラスルームイングリッシュを使用するようになることが分かった。また、安心してクラスルームイングリッシュを言える環境を整えることで、児童同士の人間関係がよりよくなっていくことが明らかとなった。このことから、学級で行われている外国語活動において児童が安心して英語を話せる環境を整える必要がある。本研究では、著者とALTによる寸劇（デモンストレーション）を見せて十分に理解させ、児童が繰り返し使用する機会を設けることで、その環境を整えた。クラスルームイングリッシュについても、これまでの外国語活動と同様の方法で児童は理解することができる。ただ、『Hi, friends! 1』教師用指導書に記載してあるクラスルームイングリッシュは使用頻度に差があるものの、非常に数が多い。そして、それらのほとんどが、指導者の表現例として示されている。児童に指示を出す、注意を促す、各Lessonの活動を充実させるための疑問文等である。褒め言葉以外は児童に応用させることが難しい。教師は、どの表現が児童も活用できるのかということについて、活動する児童の姿を思い描き、選定したり、重点的に取り扱う表現を決定したりする必要がある。そして、他の教科等と違い、1回の活動で定着を求めないという意識を教師がもつことも大切である。完全に身に付けた姿を学期末、年度末に期待するようにして毎時間の活動に臨むようにするのがよいと考えられるだろう。教師のそのような寛容な態度は、児童に失敗を恐れない安心感をもたせることとなり、楽しんで英語を話す笑顔を生み、そのような表情で友達とかかわると考える。

次に、クラスルームイングリッシュの間接的効果については、「日本語と英語の情意一致」が「温かな人間関係の構築」を促進することが明らかとなった。クラスルームイングリッシュは、各Lessonに出てくる疑問文や応答文といった主要表現以上に、児童にとって共感や楽しさの共有を生み出すものであることが見えた。気持ちがこもった表

現をしようと児童が考えるので、日本語と英語という言葉の違いよりも、他者とかわること自体に児童の思考が向かうのかもしれない。そして、多くの友達と楽しくかわろうとする雰囲気は学級全体に広がり、個々の人間関係だけでなく、学級集団にもよい影響を及ぼすことが考えられる。そのために、教師は、普段から学級経営に注力し、他教科においても児童同士が協力して学習を行い、達成感を感じさせる必要がある。その経験が外国語活動の時間にも応用されることはもちろん、多くの教育活動の根幹となると考えるからである。

以上のことから、クラスルームイングリッシュは教師が使用する教室英語というだけでなく、児童が情意を伴って円滑にコミュニケーションを図り、学級集団を充実させていくために必要不可欠であると考えられる。

6 今後の課題

現在の小学校外国語活動が記述による評価を実施していることから、今回のような質的研究は学校現場に適していると考えられる。本研究では、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を分析方法として用いたが、これに限らず、他の方法で授業分析を行い、クラスルームイングリッシュの効果が確かなものであることを考察していく必要があると考える。また、本研究では、旧学習指導要領に示されている英語を使用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度のみに焦点を当てた。しかし、異文化理解や英語そのものへの慣れ親しみといった別の観点からも実践研究を行うことは十分に可能である。さらに、本実践研究では、その対象を小学5年生としたが、英語を使用して自分の気持ちを素直に表出させるという特徴から、より若い児童の方が、効果が表れやすいと思われる。新学習指導要領が本格実施された後の児童、すなわち小学3、4年生においても、同様の実践研究をする余地があると考えられる。

引用文献

- 千田誠二（2012）.「TPRの実践における質的研究—大学初級英語クラスの場合—」『中部地区英語教育学会紀要』41, 161-168.
- 五十嵐二郎（1988）.「質的授業分析のあり方を求めて」『中国地区英語教育学会研究紀要』18, 105-108.
- 文部科学省（2008a）.『小学校学習指導要領』東京：東洋館出版社.
- 文部科学省（2008b）.『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社.
- 文部科学省（2012）.『Hi, friends! 1』東京：東京書籍.
- 文部科学省（2014）.「資料7 外国語教育における「見え方考え方」（たたき台）」『中央教育審議会教科課程部会外国語ワーキンググループ 第7回配布資料』2016年8月16日検索. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/1371098.htm
- 階戸陽太（2012）.「外国語活動に対する小学校教員の意識に関する質的研究—必修後の現状—」『小学校英語教育学会誌』12, 102-114.
- 寺島貴美（2011）.「教育講座—研究方法論—第7回 質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～」. 2016年8月4日検索. <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/45662/3/terashita0608.pdf#search=%E8%B3%AA%E7%9A%84%E7%A0%94%E7%A9%B6+%E5%88%86%E6%9E%90%E6%96%B9%E6%B3%95>
- 梅地哲郎（1992）.「クラスルーム・イングリッシュに関する一考察—研究の背景と教室英語の現状分析—」.『中国地区英語教育学会研究紀要』22, 1-11.
- 山森直人（2013）.「外国語活動に求められる教師の教室英語力の枠組みと教員研修プログラムの開発—理論と現状をふまえて—」『小学校英語教育学会誌』13, 195-210.

A Practical Report on Foreign Language Activities Focusing on Children's Use of Classroom English

—Proposal of a Model Diagram Showing the Effect of Classroom English on Pupils—

Toshihiko UCHIYAMA* · Fujishige SOMEYA**

ABSTRACT

This study intended to focus on “interaction” for “speaking or listening” subdivided into “interaction” and “presentation” according to a new course of study. This study is a practical report aimed at fostering students' attitudes toward positively communicating with others.

To this end, we focused on the classroom English used by children and identified nine types that could be used in various conversations. We let them evaluate whether they could use them with their classmates and qualitatively analyzed their free descriptions. Grounded theory approach (GTA) was used for the analysis. The results indicated that classroom English had a direct effect of saying and being said, as well as an effect of deepening human relationships. Besides this, I was able to propose a model diagram related to cultivating communication basics, which is the goal of foreign-language activities and forming good class groups.

* Saizu Elementary School in Nagaoka ** Humanities and Social Studies Education